

第2節 吉田構内(吉田遺跡)の調査

1. 附属農場フィルムハウス設置に伴う造成工事に伴う予備発掘調査



図4 調査区位置図



写真 26 調査前近景 (南東から)

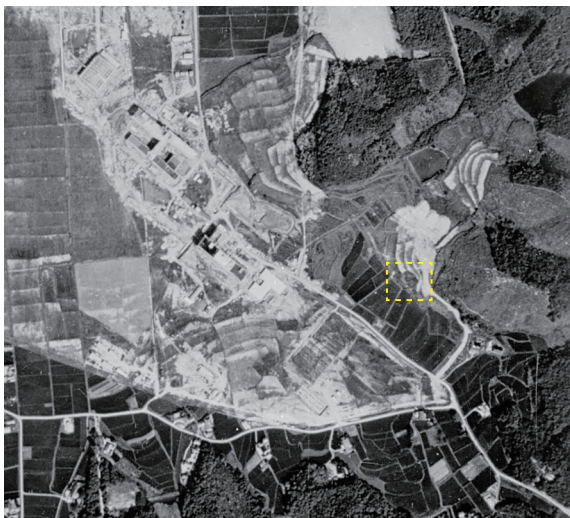


写真 27 吉田構内統合移転開始時状況 (上空から)

調査地区 吉田構内T-14・15区

調査面積 16㎡

調査期間 令和5年9月30日～10月18日

調査担当 横山成己

調査結果

(1) 調査の経緯(図4、写真26・27)

当開発計画に対しては、令和4年度第1回埋蔵文化財資料館専門委員会(令和4年7月25日開催)にて農学部より説明を受け、埋蔵文化財保護対応が諮られた。その結果、計画地周域では発掘調査例がなく、地下の様相は不明であるものの、江戸時代の^{註1}絵図等の状況から、室町時代以降に集落が形成されていた可能性が高いと推定されること、一方で本学吉田地区統合移転時に撮影された航空写真から、計画地は丘陵の縁辺が不自然に整形されており(写真27黄色破線)、移転前に宅地として造成を受けている可能性も考えられることから、地下の様相を明らかにすることを目的とする予備発掘調査の実施が承認された。

予備発掘調査は、計画地の中央に幅1.5mの南北方向トレンチと東西方向トレンチをL字状に配し、実働10日間の予定で調査を実施する運びとなった。

調査の準備工(仮ベンチマークの設置)を9月30日(金)に行い、翌週10月3日(月)から発掘調査を開始した。

【註】

1) 山口県文書館所蔵「地下上申絵図 吉田村精図」請求記号:
地下上申絵図521

(2) 調査の経過(写真28・29)

重機掘削は10月3日(月)中に終了した。翌4日(火)から東西トレンチの人力掘削を開始したものの、大きく攪乱を受けていることが判明し、本学移転前の住宅基礎部分が遺存していることを確認した

吉田構内(吉田遺跡)の調査

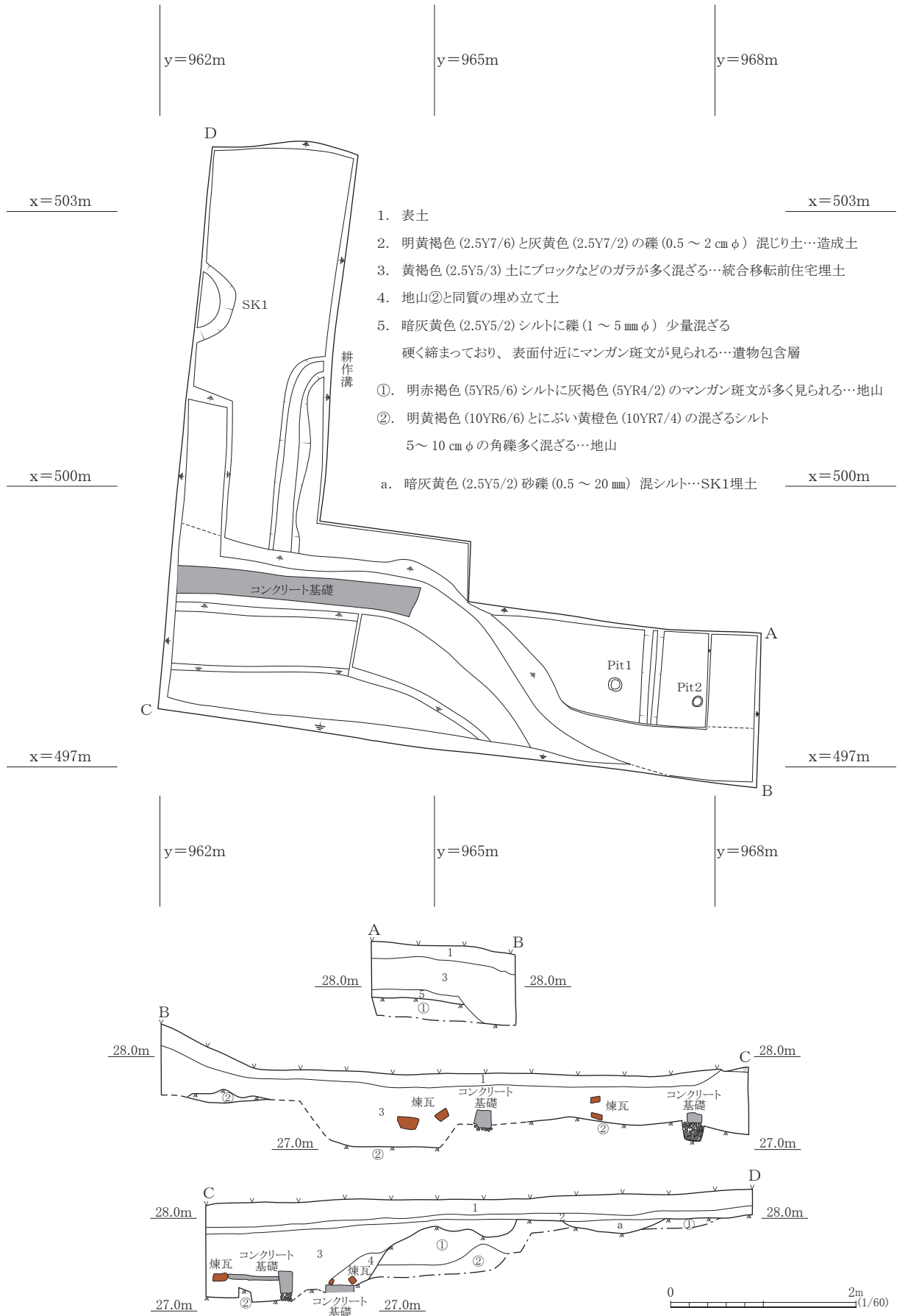


図5 調査区平面図・断面図

(写真28・29)。そのため、6日(木)に東西トレンチ西半部を北側に拡張させ、翌7日(金)から南北トレンチの人力掘削に着手した。

12日(火)に遺構の検出を終え、高所作業車により検出状況写真を撮影した。翌13日(木)に遺構を掘削し、完掘状況と調査区断面写真を撮影した。14日(金)に調査区平面図と断面図を作成し、平板測量の後に調査を終了した。17日(月)は雨天であったため、18日(火)に埋め戻し作業を行った。

(3) 調査成果(図4・5、写真26～35)

調査地点は、姫山から南に派生する丘陵端部の南西側に位置する(図4・写真27)。原地形は北から南に傾斜しているが、現地形は周辺の地表から約0.6mの深さで掘り窪められており(写真26)、この高低差がこのたびの造成工事原因となっている。

東西トレンチの調査の結果、東西トレンチの中央部から西部にかけて、本学移転前の住宅建設により、地山が0.6～0.7m掘削されていることを確認した。コンクリートと煉瓦からなる住宅基底部が遺存しており、風呂釜とみられる構造物を検出した(写真29)。構造物除去後、地山面まで検出したが、遺構は遺存していなかった。現地形に見られる0.6mの凹みは、この住宅建設に伴う削平と推定される。

南北トレンチの中央以北側および東西トレンチの東側では、現地表下0.2～0.6mの深度で、遺構検出面となる明赤褐色(5YR5/6)と明黄褐色(10YR5/2)の地山が良好に遺存していた(写真30～32)。

遺構については、南北トレンチ北側で土坑1基(SK1)、東西トレンチ東側でピット2基(Pit1・2)が検出された(図5、写真33・34)。いずれも埋土に遺物を含んでいなかったが、暗灰黄色(2.5Y5/2)を呈する(写真35)ことから中世以降に所属するものと推定される。

また、東西トレンチ東側地山上には、土師器や須恵器の小片を包含する暗灰黄色(2.5Y5/2)の自然堆積層が形成されていた(図5、写真30・31)。中世以降に北東丘陵部から南西に流入し堆積したと考えられる。北東丘陵部に古墳時代から古代にかけての集落が分布したと想定されるが、現在同地は果樹園として大きく削平を受けている。遺構遺存の可能性を指摘できるのは丘陵縁辺部、当調査区から北東約25mまでの範囲と思われる。

(4) 遺物(図6、写真36、表4)

遺物は造成土および攪乱埋土(本学移転前住宅埋土)、遺物包含層から出土した。前述のとおり、遺物包含層に含まれていた須恵器と土師器は小破片であり、図示可能な資料は造成土と攪乱埋土から出土した須恵器2片と瓦質土器2片、土師質土器1片と陶胎染付1片の6点のみである。

1・2は須恵器蓋口縁部片。1はやや膨らむ天井部から口縁を外方に下垂させる。2は扁平な天井部から口縁をほぼ垂直に下垂させる。3は瓦質土器鍋の体部片。外面に格子文叩きが施される。4は瓦質土器足鍋脚部片。内面に被熱痕が見られる。5は土師質土器大甕の口縁部片。口縁内面を肥厚させる。6は陶胎染付椀の底部片。兜巾高台で内面のみ施釉している。

(5) 小結

農学部附属農場本館南側農地(ビニールハウス設置場所)に関しては、これまで発掘調査を実施する機会がなく、長らく地下の様相が不明確であった。今回の調査により、調査地周域には中近世の遺構が分布することが確実となり、遺物包含層に含まれる土器から、調査地の北東側に古墳時代から古代にかけての遺構が分布する可能性が高まった。



写真 28 作業風景 (南西から)



写真 29 吉田構内統合移転前住宅(風呂釜) (北東から)



写真 30 東西トレンチ東壁土層断面 (西から)



写真 31 東西トレンチ南壁土層断面 (北東から)



写真 32 南北トレンチ西壁土層断面 (北東から)



写真 33 遺構検出状況 (東上空から)



写真 34 遺構検出状況 (北東上空から)



写真 35 SK1掘削状況 (北東から)

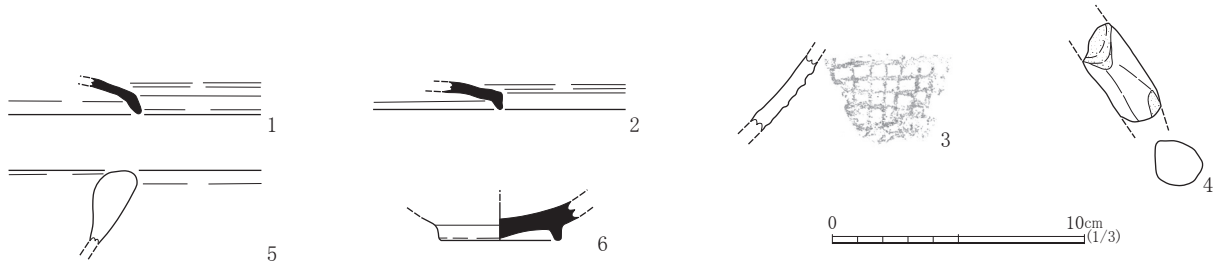


図6 出土土器実測図

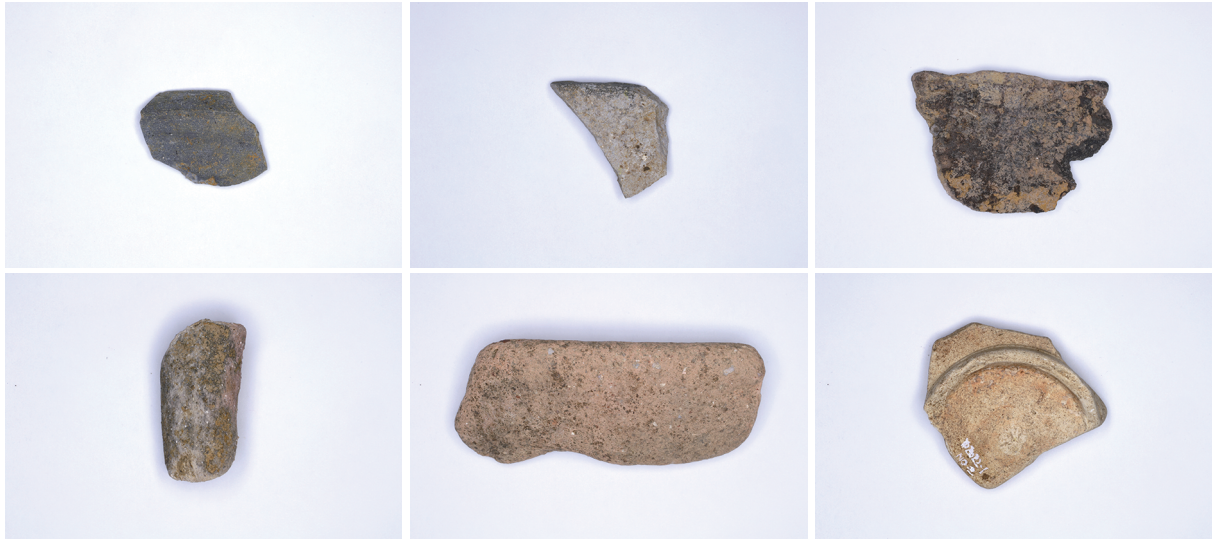


写真 36 出土遺物(土器)

表4 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
1	造成土	須恵器 蓋	口縁	③残高1.4	①灰色(N6/) ②灰白色(2.5Y7/1)		0.1~0.3mm φの砂粒(長石 など)少量混ざる	
2	造成土	須恵器 蓋	口縁	③残高1.1	①灰白色(2.5Y8/2) 黄灰色(2.5Y5/1) ②灰白色(N7/)		0.1~1mm φの砂粒(長石・ 角閃石など)少量混ざる	
3	造成土	瓦質土器 鍋	体部		①褐灰色(10YR4/1) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)		0.1~2mm φの砂粒(石英・長 石など)少量混ざる	やや土師質
4	住宅埋土	瓦質土器 足鍋	脚部		①灰黄色(2.5Y7/2)~ 黄灰色(2.5Y5/1) ②にぶい橙色(5YR7/3)		0.1~1.5mm φの砂粒(長石 など)少量混ざる	内面被熱
5	造成土	土師質土器 甕	口縁	③残高2.9	①②にぶい黄橙色 (10YR6/4)		0.1~2mm φの砂粒 (長石・くさり礫・石英など) 少量混ざる	
6	造成土	陶胎染付 椀	底部	③残高1.55 高台内径(4.4) 高台外径(4.8)	①浅黄橙色(10YR8/3) ~浅黄色(2.5Y8/3) ②灰白色(5Y8/1)		0.1~0.3mm φの砂礫(長石 など)極少量混ざる	

当工事計画に関しては、盛土による造成後のフィルムハウス設置であることから、遺構等埋蔵文化財に支障が生じる可能性は否定されたが、付随して計画された電線埋設工事が予定されていることから、工事中の立会調査を実施する運びとなった(本書所収「附属農場太陽光発電システム設置に伴う立会調査」参照)。

2. 学生会館増築工事に伴う予備発掘調査

調査地区 吉田構内H-12区 調査面積 35㎡
 調査期間 令和5年2月8日～28日 調査担当 横山成己

調査結果

(1) 調査の経緯(図7、写真37)

当開発計画については、令和3年度第4回埋蔵文化財資料館専門委員会(令和4(2022)年3月28日開催)にて施設環境部より説明があり、埋蔵文化財保護対応が諮られた。その結果、解体される既設の特殊排水処理施設(昭和51(1976)年竣工)および排水管理棟(昭和53(1978)年竣工)が埋蔵文化財調査を実施されず建設されたこと、既設学生会館新営時の予備発掘調査(令和元年度実施)や文化サークル棟新営時の予備発掘調査(令和3年度実施)にて、弥生時代に機能した河川跡が確認されていること(図7)から、増築建物の建設前に部分的に地下の様相を把握する必要があると考えられ、予備発掘調査の実施が承認された。

施設環境部に確認したところ、既設特殊排水処理施設には巨大な地下ピットが設けられているものの、施設の北東部に地下の破壊が少ない箇所が存在が認められたことから、基礎間に5m×7mの調査区を設けることとなり、実働10日間で調査を実施する運びとなった。

1月31日(火)に解体施工業者の協力で重機掘削を先行して行う予定であったが、施設環境部と業者の連絡調整が機能しておらず、2月8日(水)から調査に着手することになった。調査終了までの経過は以下の通りである。なお、重機掘削で使用したバックホーは発掘調査委託業者が用意し、解体施工業者のオペレーターの協力を得た。写真撮影用の高所作業車は発掘調査委託業者が手配した。調査区の埋め戻しは解体施工業者が行った。

(2) 調査の経過

2月8日(水)重機掘削
 2月9日(木)旧耕土掘削・座標杭設定・側溝掘削
 2月10日(金)雨天作業中止
 2月11日(土)現場復旧作業・旧床土上面検出・写真撮影・側溝掘削
 2月13日(月)雨天作業中止
 2月14日(火)現場復旧作業・側溝掘削・3層上面検出
 2月15日(水)3層上面写真撮影・3層掘削
 2月16日(木)4層上面検出・写真撮影
 2月17日(金)4層掘削・側溝掘削
 2月18日(土)作業を予定していたが雨天のため作業中止
 2月20日(月)現場復旧・4層掘削
 2月21日(火)4層掘削
 2月22日(水)4層掘削・完掘写真および土層断面撮影
 2月24日(金)調査担当者休暇のため作業中止
 2月27日(月)平板測量・断面図作成・ブルーシート洗浄など
 2月28日(火)地山マウンド半裁・土嚢袋撤去・機材洗浄・撤収作業

吉田構内(吉田遺跡)の調査

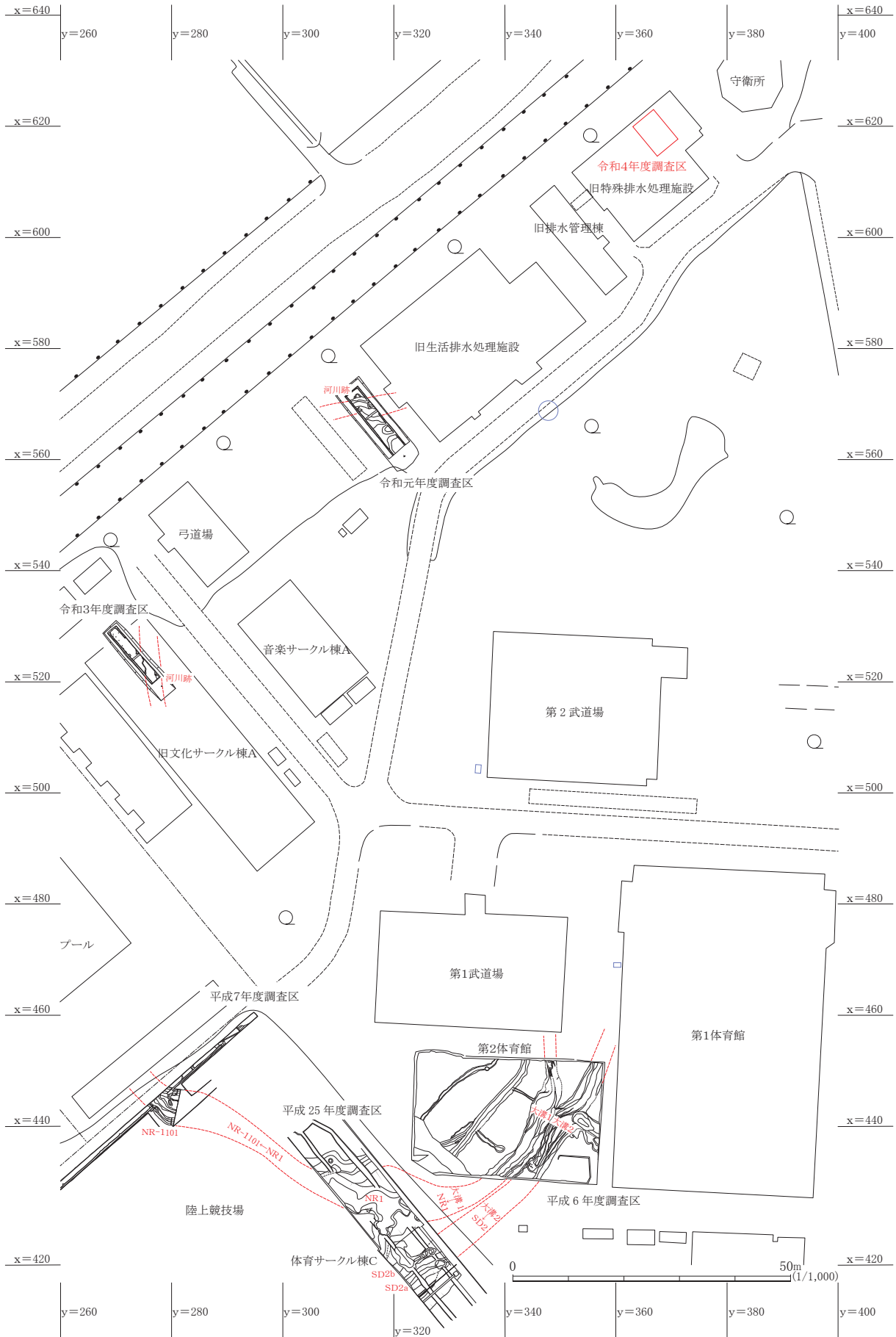


図7 調査区位置と周辺における河川・溝検出状況

吉田構内(吉田遺跡)の調査

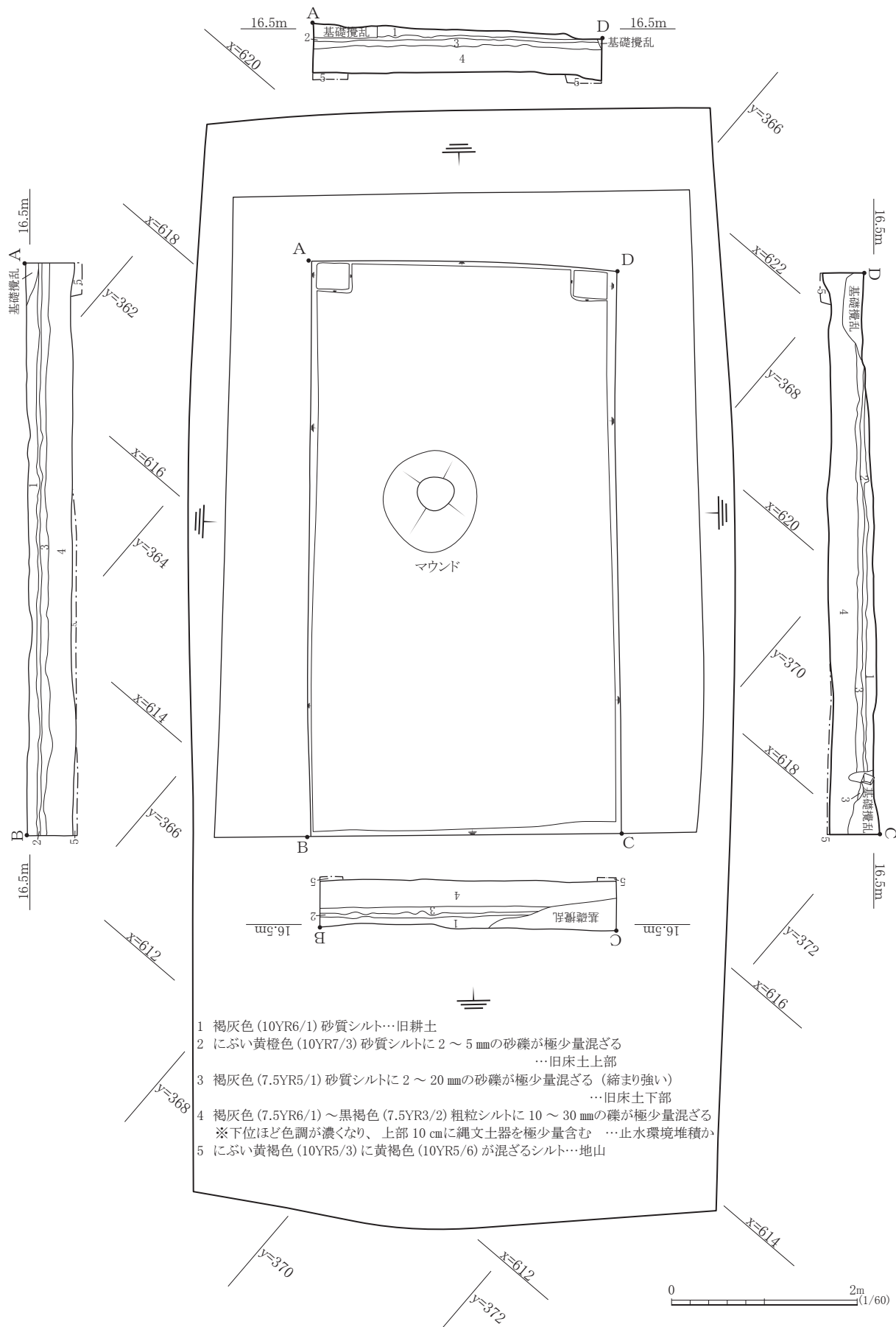


図8 調査区平面図・断面図

(3) 調査成果(図8、写真38～44)

調査地の現地表面は、解体工事後に整地された状態ではあるが、標高約18mを測る。調査においては、吉田キャンパス造成時の盛土を重機で掘削し(写真38)、現地表下約1.5m、標高約16.5mにて旧耕土上面を検出した。調査区の四隅は既設建物の基礎により攪乱を受けていた(写真39白色ライン)が、旧耕土は良好に遺存していた。

盛土が予想以上に厚く施されていたことから、作業の安全確保のため、調査区の北西、北東、南西壁側に幅1mの平坦部を設け、南東側に昇降のためのスロープを設置し、以下の層を人力で掘削した。確認した層序は以下の通りである(図8、写真43)。

- 1層: 褐灰色(10YR6/1)砂質シルト…旧耕土(層厚約10cm)
- 2層: にぶい黄橙色(10YR7/3)砂質シルト…旧床土(層厚約5cm)
- 3層: 褐灰色(7.5YR5/1)砂質シルト※締まり強い(層厚約5cm)
- 4層: 褐灰色(7.5YR6/1)～黒褐色(4.5YR3/2)シルト
 - ※下位ほど色が濃く、締まりが強い(層厚約30cm)
- 5層: にぶい黄褐色に黄褐色が混ざるシルト…地山

3層は2層(旧床土)と区別したが、元来は同一の客土で、上位が耕作の影響により黄色化したと考えられる。各層上面で遺構検出を試みたが、耕作に伴う鋤溝や暗渠を含め、いかなる遺構も確認できなかった(写真40)。なお、褐色～黒色系堆積土であることから遺構の確認が困難な4層では、上面のほか下位7cmにおいても遺構検出を試みたが、遺構を確認することはできなかった。

遺物に関しては1・2層で陶磁器類を、3・4層で縄文土器を確認した。いずれも小片で図化不能である。4層の縄文土器は希薄ではあるが層上位10cmに特徴的に含まれており(写真44)、中位から下位にかけては含まれていなかった。類似する状況は当調査区から南西70m地点で令和元(2019)年に実施した調査でも見受けられた^{註1}が、縄文土器が含まれる堆積層は浅黄色(2.5Y7/4)細粒シルトであり、土質が異なっている。

標高約16m地点で検出された地山上面にも遺構は確認されなかったが、調査区中央やや西寄りに径約1m、高さ0.1mほどの高まり(マウンド)を検出した。調査最終盤で半裁したところ、人為的な構造物でなく、倒木痕などの自然作用によるマウンドであることを確認した(図8、写真41・42)。

【註】

- 1) 横山成己(2023)「学生会館(仮称)新営工事に伴う予備発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—令和元年度—』, 山口

(5) 小結

4層は、その土質から当地周域が縄文時代を中心に湖沼等の止水環境であったことを示し、遺物の包含状況は、上位に堆積が及ぶまで人類活動が活発でなかったことを示していると考えられる。

学生会館新営時の予備発掘調査や文化サークル棟新営時の予備発掘調査で確認された河川跡は、標高約16.5mの地山上面で検出しているが、当調査区の標高約16.5mは旧耕土検出高で、当地における水田が西方に比して低く形成されていることが分かる。4層上位に自然堆積層を確認できないことは、当地が大きく削平を受けていることを示しており、周域に顕著な埋蔵文化財が遺存する可能性は低いと言える。以上の調査成果を令和4年度第4回埋蔵文化財資料館専門委員会(令和5(2023)年3月30日(木)開催)に諮り、当計画に対する埋蔵文化財保護対応は予備発掘調査に止めることが承認された。



写真 37 特殊排水処理施設・排水管理棟
解体状況 (南から)



写真 38 重機掘削風景 (北から)



写真 39 1層：旧耕土上面検出状況 (西から)



写真 40 4層上面検出状況 (北西から)



写真 41 完掘状況 (南東から)



写真 42 マウント半裁状況 (東から)



写真 43 調査区北西-北東壁土層断面 (南から)



写真 44 南西壁4層縄文土器出土状況 (東から)

3. 特別支援学校校舎改修工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内B-21・22区、C-21・22区

調査面積 約890㎡

調査期間 令和4年4月25日～11月21日

調査担当 水久保祥子

調査結果

(1) 調査の経緯

特別支援学校校舎改修工事伴って屋外配管等の更新工事が計画された。令和2年度第5回埋蔵文化財資料館専門委員会(令和3年3月31日(水)開催)において、埋蔵文化財保護対応についての審議の結果、工事立会として対応することが決定した。

工事計画は令和3年度から令和4年度にかけて立てられており、今回報告するものは全体の工事計画のうち令和4年度中に着手したものである。工事計画は基本、既設管路と重なるため工事立会となっているが、新規掘削となる箇所(I区)についてのみ事前に調査を行った。

(2) 調査の経過(図9)

調査は工事の着手に合わせて順次行い、調査区名は調査順に付与した。調査区名は令和3年度から^{註1}継続し、今年度はC区からとなる。

4月25日(月) C区

4月27日(水) D区

5月9日(月) E区

5月20日(金) F区

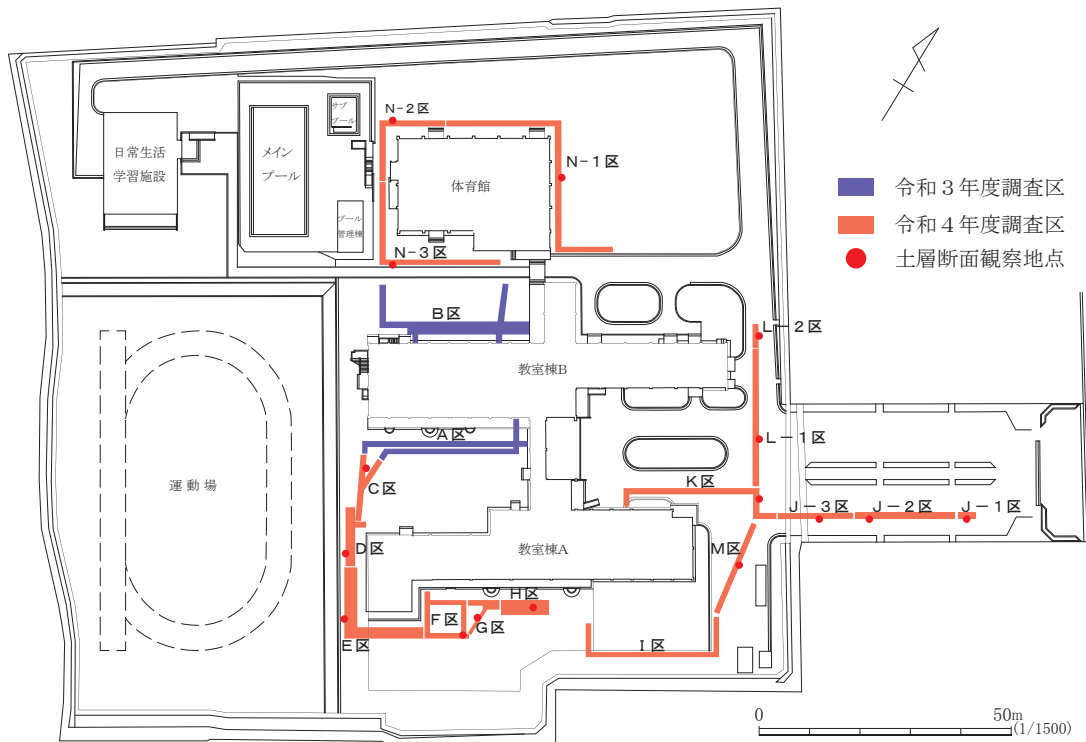


図9 調査区位置図

5月27日(金) G区
 6月17日(金) H区
 7月20日(水)～8月5日(金) I区
 7月20日(水) J-1区・K区
 7月22日(金) L-1区
 7月26日(火) J-2区
 7月28日(木) J-3区
 7月29日(金) L-2区
 8月2日(火) M区
 11月4日(金) N-1区
 11月15日(火) N-2区
 11月21日(月) N-3区

(3)調査の成果

教室棟Aの西側にあたるC・D区と南西部のE区の層序はほぼ同じであった(図10、写真45～47)。C・D区が①表土、②真砂土、③盛土、④砂礫で、C区で現地地表下約65cm、D区で現地地表下約110cmで砂礫層となる。E区の層序は①表土、②・③・④盛土、⑤砂礫、と厚く盛土があり、現地地表下約100cmで灰色中砂～細礫層となっている。

教室棟Aの南側にあるF・G・H区では、現地地表下75～100cmで灰色～黒色のシルト層が厚く堆積する様子が確認された(図10・11、写真48～50)。F・G区の最下層となる現地地表下123～135cmで確認した黒褐色シルト層には木片が含まれている。H区では現地地表下100～145cmの深さでシルト層が堆積し、その下層には灰白色の礫層が確認された。

I区は教室棟Aの南西部にある植栽を回避するために新規掘削となった配管路で、植栽部分を囲んだコの字型の調査区となる(図13)。基本層序は、①表土・盛土、②灰色シルト～細砂(旧耕土)、③灰黄色砂質シルト(旧床土)、④青灰色極細砂混シルト、⑤灰色極細砂混粘土質シルトとなっており、それより下層は灰黄褐色～明緑灰色シルトの地山層となる(図14・15、写真62～64・69)。④層は弥生時代から中世の遺物を含む遺物包含層で、⑤層は弥生時代の遺物包含層である。調査区の東端部では遺物包含層の堆積はなく、耕土直下で地山層となる(図14、写真65)。

I区で検出した地山面は、まだら状に上層が食い込む様相を呈していた。遺構は、南北方向調査区(西側)で南東～北西方向の溝状の遺構(SD1)を1条検出した(図15、写真66～68)。溝は幅約80～120cm、深さ11～36cmを測る。溝底は南東から北西へ向かって降下しているが水流があったような堆積はみられない。溝底からは木片が出土し、埋土からは弥生時代中期初頭の土器片が出土している。また、東西方向の調査区の中央付近で浅い土坑状の遺構を検出したが、遺物は出土しなかった(図13、写真57～59)。

J区は学校正門から校舎に至る通路上にあたる。調査の便宜上、J-1～3区に分けているが基本層序に大きな差異はなく、工事掘削深度1mの範囲内では造成土かと思われる砂礫層がみられた(図11、写真51)。

K区は教室棟Aの北東側、L区は教室棟Bの東側、M区は教室棟Aの東側にあり、いずれも現地地表下30～35cm前後で砂礫層となる(図11・12、写真52～54)。M区でのみ現地地表下95cmでオリーブ黒色細砂

混シルト層が確認された。

体育館の周囲となるN区では、体育館東から北側をN-1区、北西側をN-2区、南西から南側をN-3区と便宜上分けている。N-1区は工事掘削深度70～100cmで全て盛土で、N-2区では現地地表下105～125cmでオリーブ黒色の砂質シルト層となる(図12、写真55・56)。N-3区では工事掘削深度が80cmに留まり、盛土の範囲内であった。

(4) 遺物(図16・17、写真70・71、表5・6)

遺物は全てI区で出土したものである。

1・2はSD1から出土したもので、1は弥生土器高坏の脚部。外面に縦方向のミガキが施されている。坏部内面底部にも僅かにミガキが確認できる。2は弥生土器甕の口縁部片。口縁部の下に5条のヘラ描直線文を施し、その直下に刺突文を施す。中期初頭。3・4はいずれも遺物包含層2から出土したもので、弥生土器甕の口縁部片。5は東西方向調査区の遺物包含層1から出土した弥生土器甕の底部片。

6はSD1から出土したもので、砥石としているが片面の上端部が湾曲している。7は東西方向調査区の遺物包含層から出土した砥石。6・7ともに石材は流紋岩。

(5) まとめ

特別支援学校の主な既往の調査としては、昭和54(1979)年4月にその新営に際して予定地に110ヶ所の試掘壙を設定して試掘調査が行われている。その結果、敷地の北西部では弥生時代から古墳時代の溝や平安時代の柱穴が、西部(運動場西端部)と東部(正門周辺)においては遺物包含層が検出され、新営予定地の中央部では顕著な埋蔵文化財は確認されなかったことから、校舎は新営予定地中央部を中心に計画された。新営予定地北西部に計画されていた体育館および北西縁で計画されていた排水溝・擁護壁は都合上変更が困難なため、再度試掘調査が行われた。体育館新営予定地では顕著な遺構・遺物は確認されず、計画に支障ないものと判断されたが、排水溝・擁護壁の計画地域では遺構の埋土と思われる層から弥生土器の出土が確認された。この部分については同年11月に発掘調査が行われ、現地地表下約30cmで縄文時代晩期の土壌や弥生時代の溝等の遺構が検出されている。^{註2}

昭和58(1983)年2月に行われたプール新営に伴う立会調査では、遺構・遺物は確認されなかったが、現地地表下70cmで黒灰色粘土層(層厚約40～60cm)、その下に青灰色粘土層の地山が確認されている。また、平成10(1998)年度には教室棟Bの北西側で現地地表下約100cmで弥生時代から古墳時代の遺構が検出されている。^{註3}

平成22(2010)年度には、教室棟Aと教室棟Bの間で行われた雨水排水補修工事に伴う立会調査では現地地表下60cmで遺物包含層と思われる黒褐色砂質土層が確認されている。^{註4}

また、最も直近の調査となる令和元(2019)年度のライフライン再生工事に伴う立会調査では、正門から教室棟B間で現地地表下37～61cmで遺物包含層、現地地表下32cmで遺構を検出し、教室棟Bの北東側の現地地表下52cmで遺物包含層あるいは河川跡土層が確認されている。^{註5}

平成22年度調査と令和元年度調査は今次調査のL区に近い調査地での成果であるが、今回の調査では造成土の直下で河川堆積と思われる砂礫層となり、遺物包含層は確認されなかった。

今回の調査では、既往の調査で遺構・遺物が検出された北西縁や教室棟Bの北西側などの周辺は調査対象とはならず、遺構・遺物の埋存状況の再確認はなされなかったが、これまで詳細な調査が行われてこなかった場所についてその状況を確認することができた。

教室棟A以南では粘土質シルト層が厚く堆積している状況が確認され、一帯が湿潤な状態にあったものと推測されることが分かった。詳細な記述はないが、これは特別支援学校新営時の試掘墳での調査でも確認されていたようであるが、改めて確認することができた。学校敷地の南東部、I区では現地表下約40～65cmで遺物包含層となり、現地表下76～86cmとなる地山面では弥生時代中期初頭の遺構が検出された。学校敷地全体としては造成によって削平されている場所も多いようではあるが、今後も新規掘削となるところでは慎重に調査を行う必要がある。

【註】

1) A・B区については、昨年度に報告している。

水久保祥子(2025)「特別支援学校校舎改修工事に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—令和3年度—』, 山口

2) 河村吉行(1991)「付篇 I 吉田構内教育学部附属養護学校新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報IX』, 山口

3) 河村吉行(1985)「教育学部附属養護学校プール新営に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報II』, 山口

4) 田畑直彦(2021)「教育学部附属養護学校給食室改修工事に伴う試掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVIII』, 山口

5) 横山成己(2014)「教育学部附属特別支援学校雨水排水補修工事に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成22年度—』, 山口

6) 田畑直彦(2023)「ライフライン再生(電気設備)工事・ライフライン再生(給水設備)工事に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—令和元年度—』, 山口

7) 新営時の調査成果を記す註2の本文には記述がないが、註3の本文に教室棟A以南の地域においても黒灰色粘土層が確認されている旨の記述がある。



写真45 C区土層断面(北西から)

C区	
1	1 表土
2	2 真砂土
	3 盛土
3	4 灰黄色 (2.5Y6/2) 中砂~極粗砂 (1~10cmφの礫含む)
4	



写真46 D区土層断面(北東から)

D区	
1	1 工事の掘削土
2	2 表土
3	3 真砂土
4	4 盛土
	5 黄灰色 (2.5Y5/1) 中砂~細礫
5	



写真47 E区土層断面(北東から)

E区	
1	1 表土
2	2 盛土
3	3 盛土
4	4 盛土
	5 灰色 (10Y5/1) 中砂~細礫
5	



写真48 F区土層断面(南から)

F区	
1	1 表土
2	2 真砂土
3	3 盛土
4	4 盛土
5	5 盛土
6	6 緑灰色 (5G6/1) シルト
7	7 灰色 (N5/) 粘土質シルト
8	8 オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 粘土質シルト
9	9 オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘土質シルト
10	10 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト (木片含む)

0 50cm (1/20)

図10 土層断面柱状図



写真49 G区土層断面(北から)

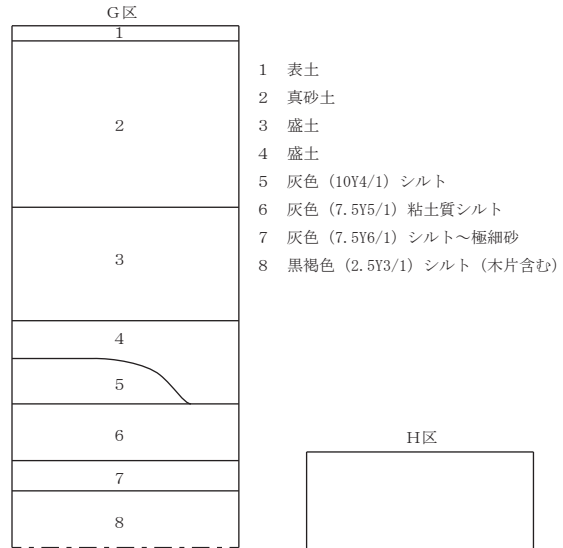


写真50 H区土層断面(南東から)

- H区
-
- | | |
|---|--|
| 1 | 表土・盛土 |
| 2 | 灰色 (7.5Y6/1) 粘土質シルト |
| 3 | 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト～細砂
(0.5～1cmφの礫含む) |
| 4 | 灰白色 (N7/) 細砂～中砂
(0.5～1cmφの礫含む) |



写真51 J-1区土層断面(西から)

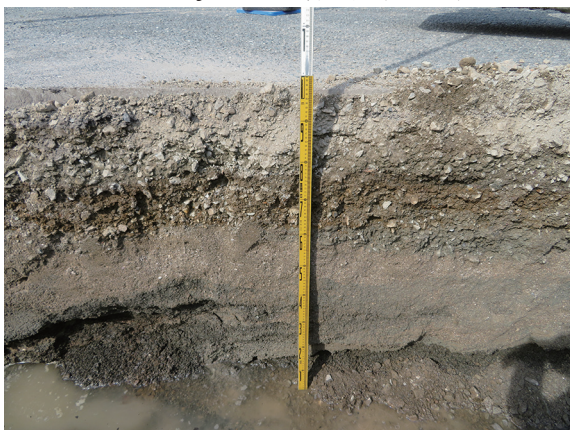
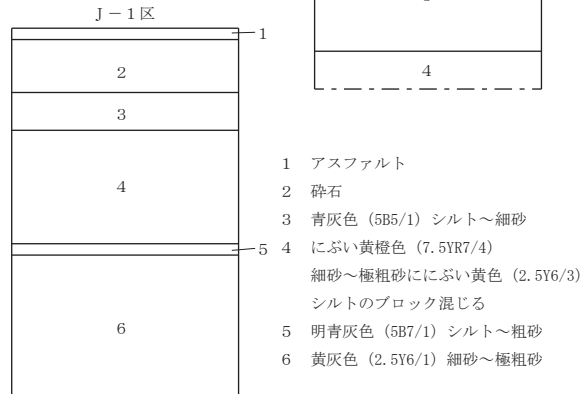


写真52 K区土層断面(西から)

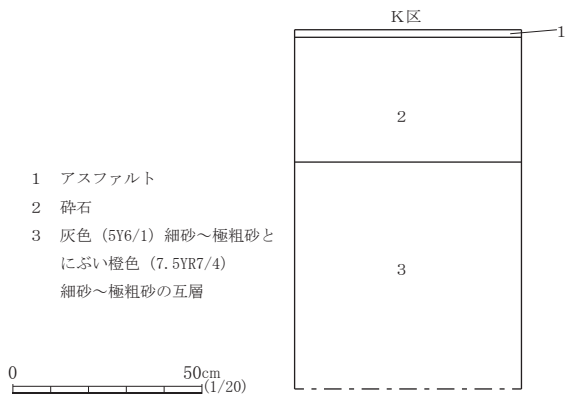


図11 土層断面柱状図



写真53 L-1区土層断面(南西から)

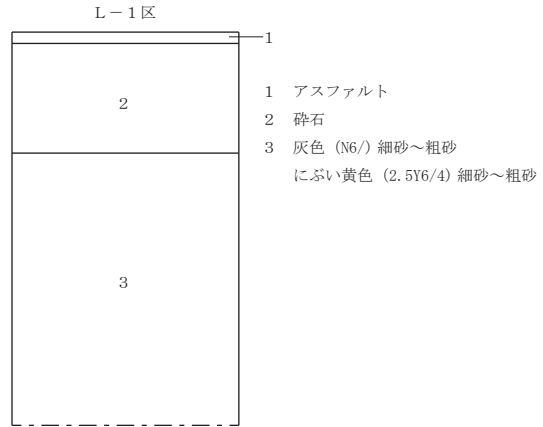


写真54 M区土層断面(西から)

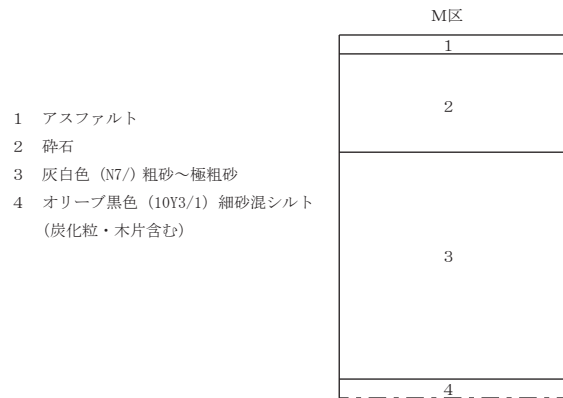


写真55 N-1区土層断面(南から)

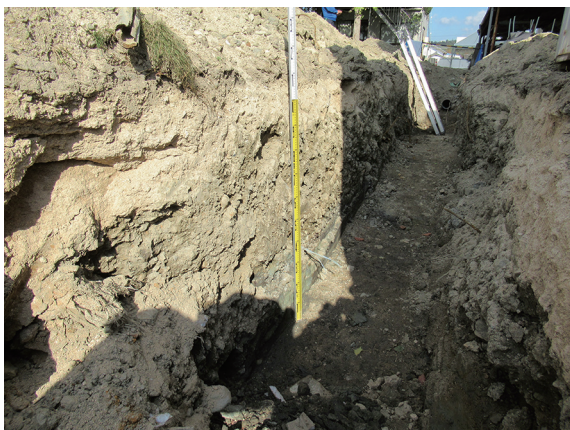
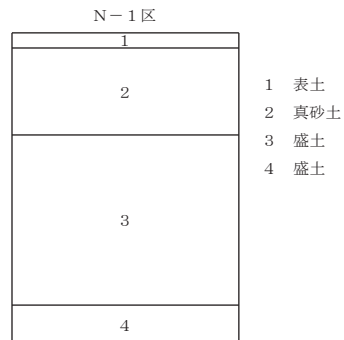


写真56 N-2区土層断面(東から)

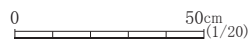
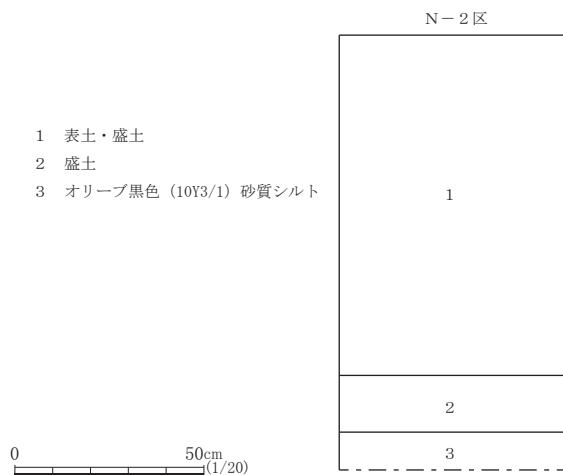


図12 土層断面柱状図



写真57 I区(東西方向西半)遺構面検出状況(南西から)



写真58 I区(東西方向西半)遺構完掘状況(南西から)



写真59 I区(東西方向西半)遺構完掘状況(北東から)



写真60 I区(東西方向東半)遺構面検出状況(南西から)

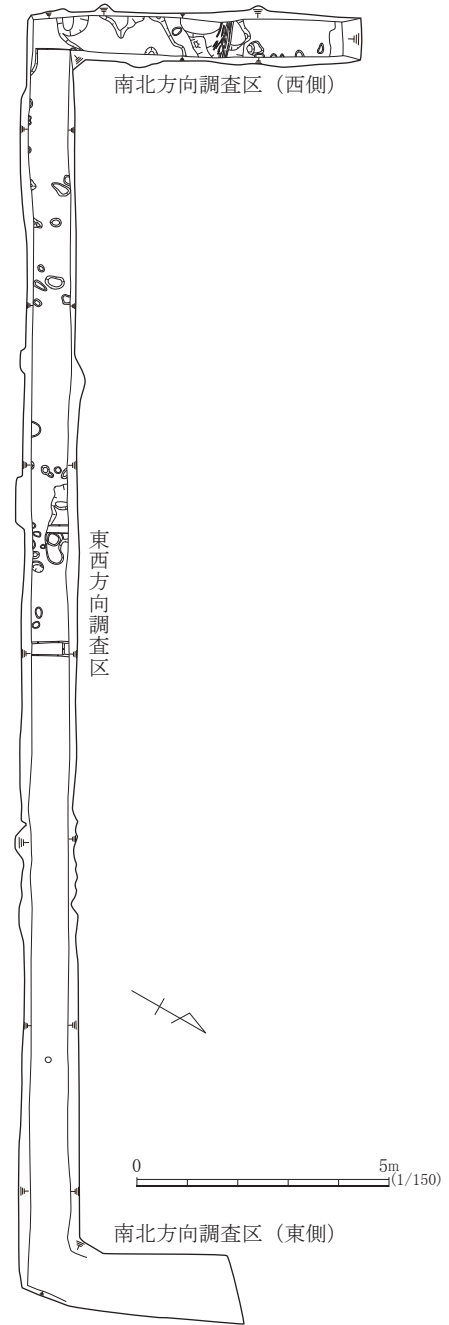


図13 I区平面図



写真61 I区(南北方向東側)遺構面検出状況(南東から)



写真62 I区(東西方向西半)南壁土層断面(西から)



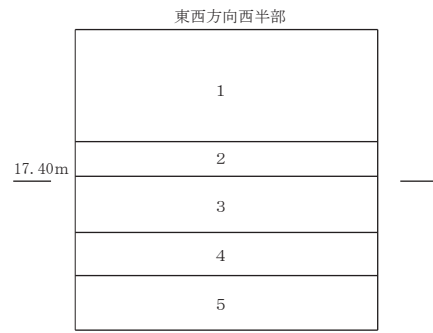
写真63 I区(東西方向西半)南壁土層断面(東から)



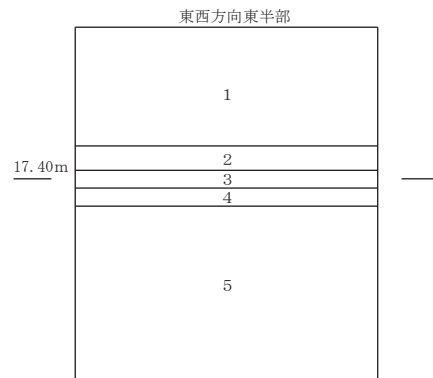
写真64 I区(東西方向東半)南壁土層断面(西から)



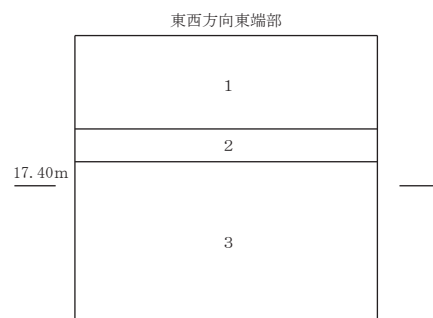
写真65 I区(東西方向東半)南壁土層断面(東から)



- 1 表土・盛土
- 2 灰色 (10Y5/1) シルト～細砂 (旧耕土)
- 3 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質シルト
(0.5cmφの礫含む) (旧床土)
- 4 青灰色 (10BG5/1) 極細砂混シルト (遺物包含層)
- 5 灰色 (5Y4/1) 極細砂混粘土質シルト (遺物包含層)



- 1 表土・盛土
- 2 灰色 (10Y5/1) シルト～細砂 (旧耕土)
- 3 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質シルト
(0.5cmφの礫含む) (旧床土)
- 4 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト
- 5 明緑灰色 (10G7/1) 極細砂混粘土質シルト (地山)



- 1 表土・盛土
- 2 灰色 (10Y5/1) シルト～細砂 (旧耕土)
- 3 明オリーブ灰色 (2.5GY6/1) シルト混中砂～大礫 (地山)

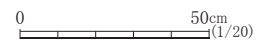


図14 I区(東西方向)土層断面図柱状図

- | | |
|--------------------------------------|--|
| 1 表土・盛土 | |
| 2 灰色(10Y5/1)シルト～細砂(旧耕土) | |
| 3 灰黄色(2.5Y6/2)砂質シルト(0.5cmφの礫含む)(旧床土) | |
| 4 青灰色(10BG5/1)極細砂混粘土(遺物包含層) | |
| 5 灰色(5Y4/1)極細砂混粘土質シルト(遺物包含層) | a-1 灰色(5Y4/1)極細砂混粘土質シルトと
オリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルトがまだらに混じる |
| 6 浅黄色(2.5Y7/4)粘土質シルト(地山) | a-2 オリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルト |
| 7 明緑灰色(10G7/1)極細砂混粘土質シルト(地山) | a-3 黒褐色(2.5Y3/1)シルト(木片多く含む) |
| 8 明青灰色(10BG7/1)細砂～粗砂混粘土質シルト(地山) | a-4 明青灰色(10BG7/1)粘土質シルトに
オリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルトがまだらに混じる |
| 9 明青灰色(10BG7/1)シルト混細砂～細礫(地山) | |
| 10 明黄褐色(10YR6/6)シルト混細砂～細礫(地山) | |

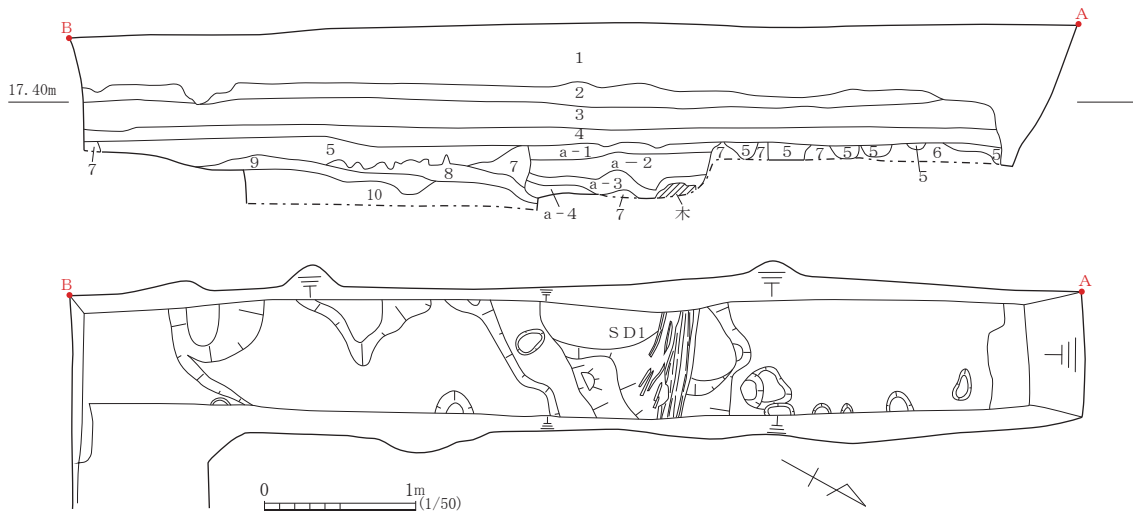


図15 I区(南北方向西側)平面図・断面図



写真66 I区(南北方向西側)遺構検出状況(北西から)



写真67 I区(南北方向西側)遺構完掘状況(北西から)



写真68 I区SD1完掘状況(東から)



写真69 I区(南北方向西側)土層断面(南東から)

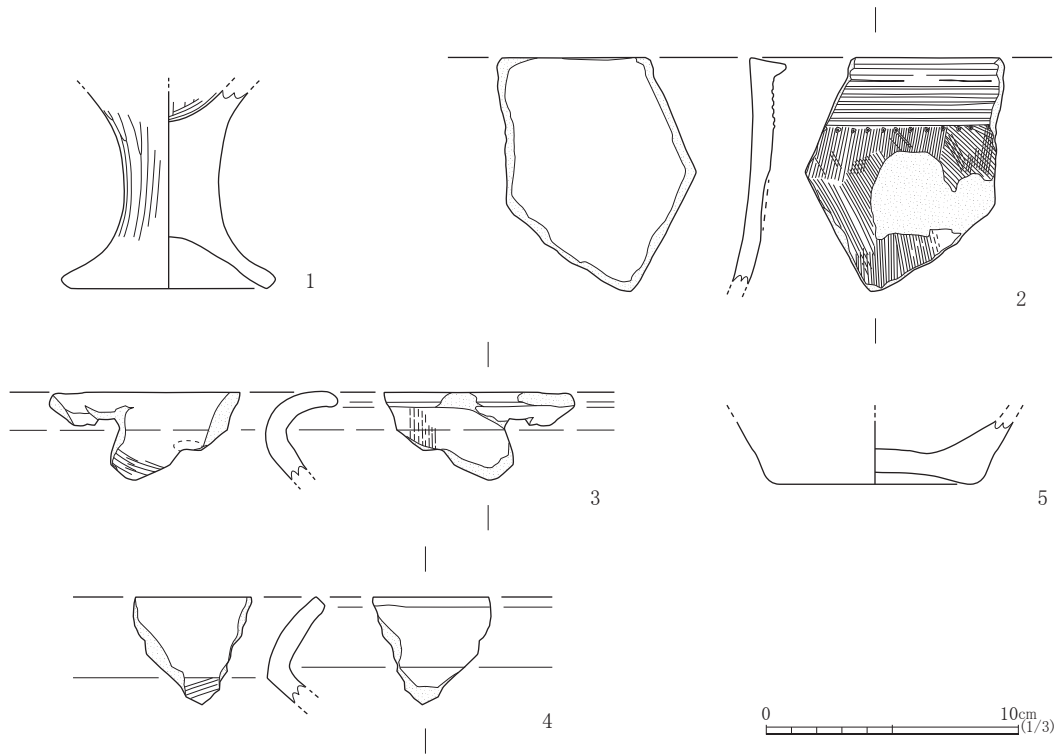


図16 出土土器実測図

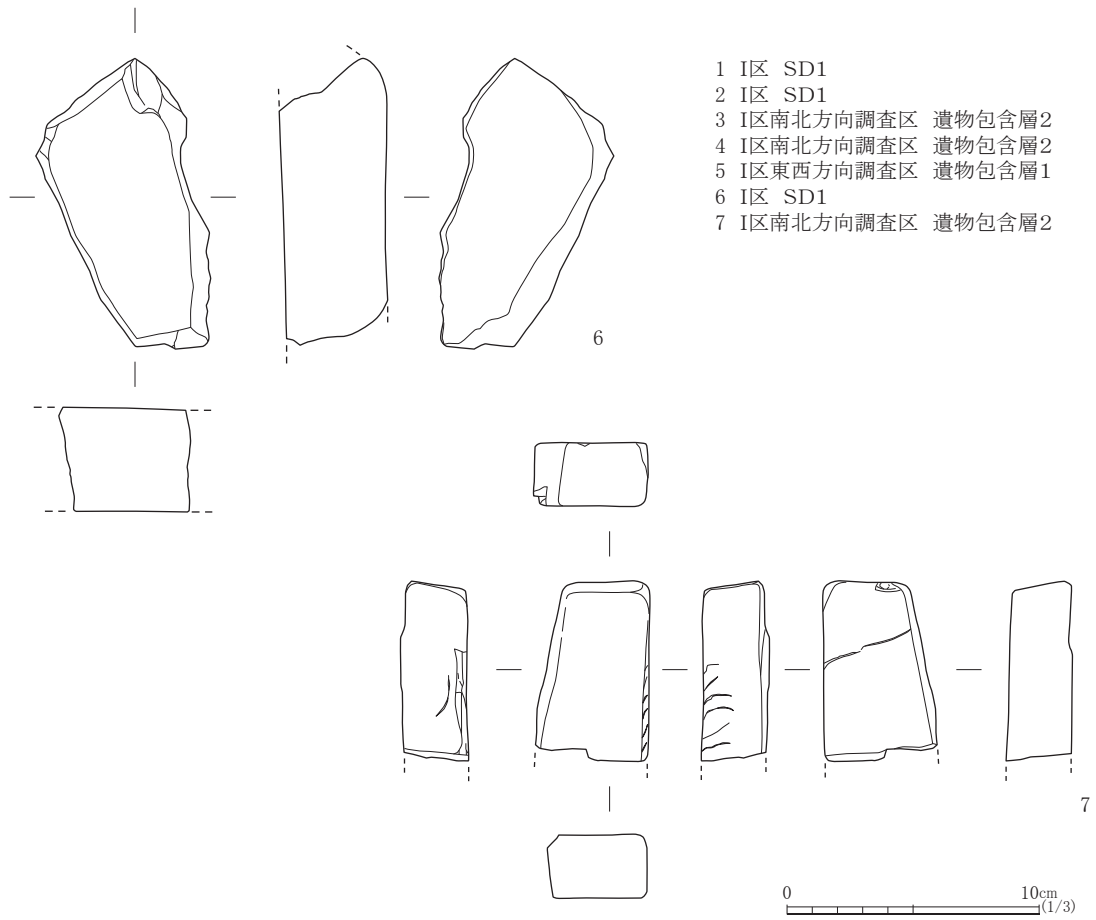


図17 出土石器実測図

吉田構内(吉田遺跡)の調査

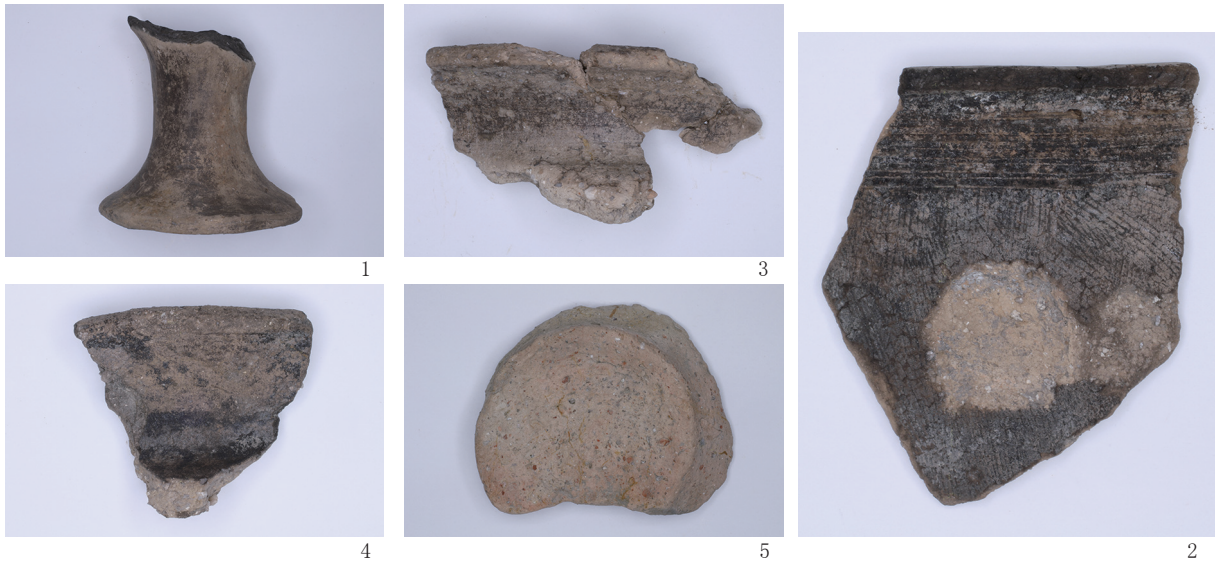


写真70 出土遺物(土器)

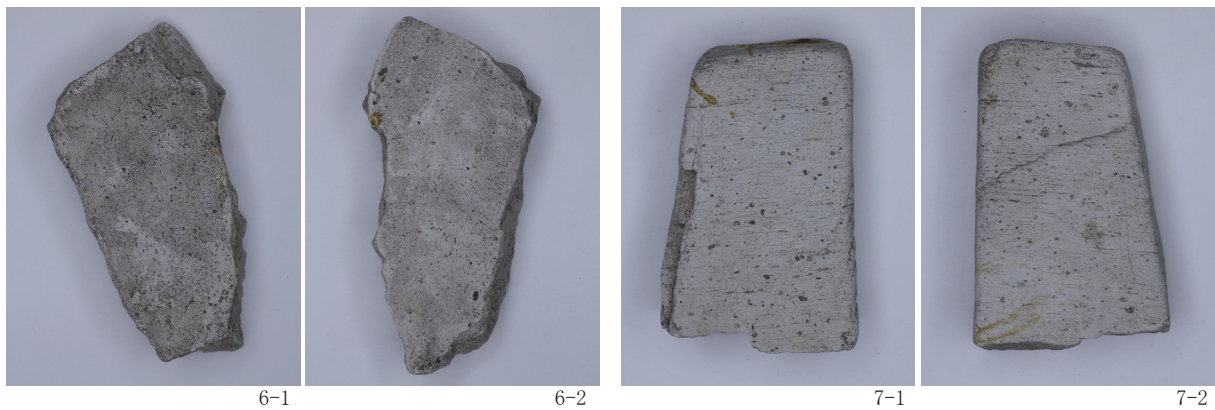


写真71 出土遺物(石器)

表5 出土遺物(土器) 観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
1	I区 SD1	弥生土器 高坏	脚部	②(7.8) ③残高7.8	①にぶい黄橙色(10YR6/3) ②暗灰色(N3/)	0.5~3mm φの石英含む		
2	I区 SD1	弥生土器 甕	口縁部	③残高9.0	①褐灰色(10YR4/1) ②灰黄褐色(10YR6/2)	0.5~2mm φの長石・石英含 む		
3	I区 包含層2	弥生土器 甕	口縁部	③残高3.5	①灰黄色(2.5Y7/2) ②浅黄色(2.5Y7/3)	0.5~3mm φの長石・石英含 む		
4	I区 包含層2	弥生土器 甕	口縁部	③残高4.2	①②灰褐色(7.5YR5/2)	0.5~5mm φの石英含む		
5	II区 包含層1	弥生土器 甕	底部	②(8.0) ③残高2.5	①浅黄橙色(7.5YR8/4) ②灰白色(10YR7/1)	0.5~5mm φの長石・石英・く さり礫含む		

表6 出土遺物(石器) 観察表

法量()は残存値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	法量(cm)				石材	備考
			①長さ	②厚	③重量(g)	④		
6	I区 SD1	砥石	①(11.5)	②(5.8)	③(4.05)	④(420.47)	流紋岩	
7	I区 包含層2	砥石	①(7.1)	②(4.5)	③(2.6)	④(153.53)	流紋岩	

4. 守衛所周辺電気配線盛替え工事に伴う立会調査



図18 調査区位置図

調査地区 吉田構内I-15
調査面積 3㎡
調査期間 令和4年11月4日
調査担当 横山成己
調査結果

特殊排水処理施設の解体に伴い、守衛所の屋外電気線盛替工事が必要となったことから、施設環境部より深度0.7mの掘削工事計画が提出された。埋蔵文化財保護対応について、令和4(1922)年8月8日(月)から第2回埋蔵文化財資料館専門委員会(メール審議)が開催され、工事立会にて対応することが承認された。

工事は2箇所で開催されたが、守衛所南部の工事箇所については、既往の調査で盛土内に掘削が止まることが明白であったことから、地下の様相が不明確な共用棟A東側の工事箇所を対象に調査を実施する運びとなった(図18)。

実際の工事は、造成土内に止まる現地表下0.45mまでの掘削であり、埋蔵文化財に支障が生じないことを確認し、調査を終了した(図19、写真72)。



写真72 調査地南壁土層断面(北東から)

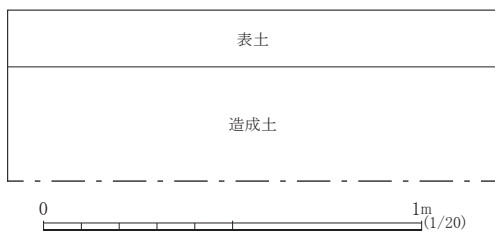


図19 土層断面柱状図

5. 農学部授業(生物資源環境科学基礎実験)に伴う立会調査

調査地区 吉田構内S-16、T-18

調査面積 1m²

調査期間 令和4年11月8日

調査担当 横山成己

調査結果

農学部開講の授業「生物資源環境科学基礎実験」では、毎年吉田構内東～南東部に位置する農学部附属農場敷地内、果樹園と実験水田の2箇所掘削実習を行い、本学移転前の土地利用である棚田耕作土の土壌観察を行っている。広域に及ぶ水田と果樹園敷地の地下の様相は不明確な部分が多いことから、当館は授業後に土層の断面確認を実施させていただき、地下情報の獲得に努めている。令和4年度は実験水田3号田南西部(第1地点)と、東側果樹園中央部(第2地点)にて掘削が行われた(図20)ことから、両地点で土層を観察した。第1地点は埋蔵文化財に関連する堆積層を確認できなかったが(図21、写真73)、第2地点では耕作関連土の下位に遺物包含層の可能性がある層位を確認した(図21、写真74)。

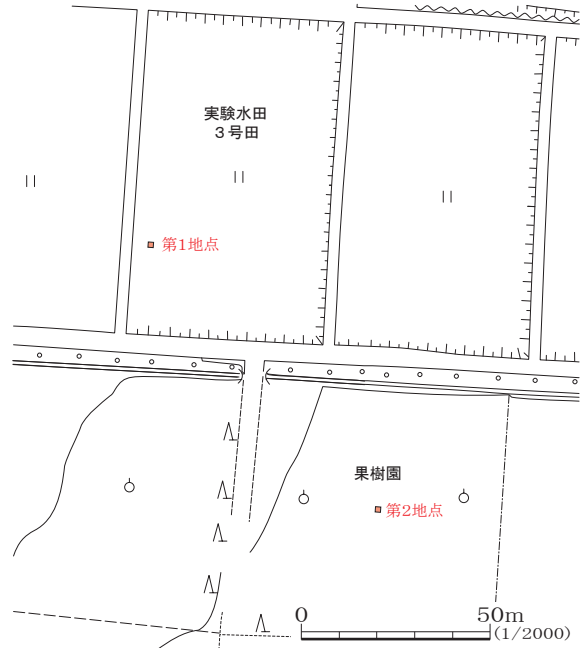


図20 調査区位置図



写真73 第1地点東壁土層断面(西から)



写真74 第2地点東壁土層断面(西から)

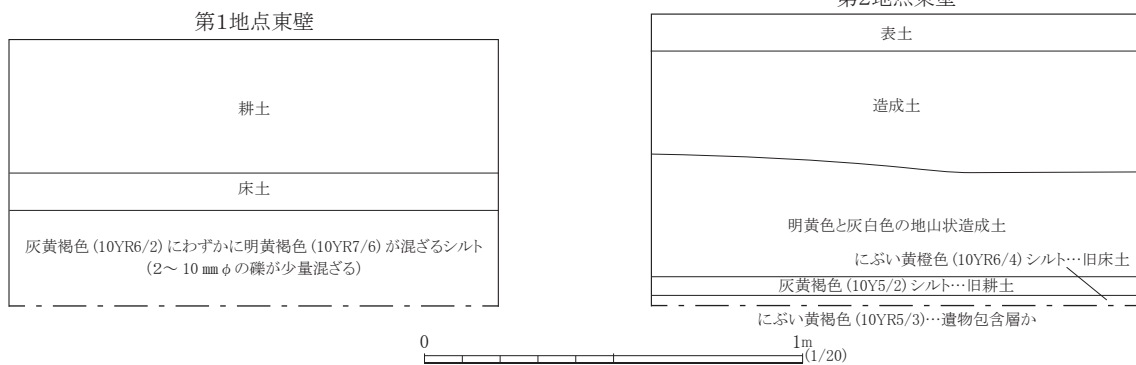


図21 土層断面柱状図

6. 附属農場太陽光発電システム設置に伴う電線埋設工事に伴う立会調査



図 22 調査区位置図

調査地区 吉田構内R-16、T-17

調査面積 27㎡

調査期間 令和5年1月27日

調査担当 横山成己

調査結果

当該年度に農学部附属農場フィルムハウスが増築されたことに伴い、大学改革推進補助金(デジタル活用高度専門人材育成事業)による、太陽光発電を蓄電池およびフィルムハウスに供給するための電線埋設工事計画が、令和4年度第1回埋蔵文化財資料館専門委員会(令和4(2022)年7月25日(月)開催)に提出された(図18)。審議の結果、工事立会にて埋蔵文化財保護対応を行うことが提案され、承認された。立会は、電気線埋設路掘削が終了した段階で行った。掘削幅は0.5m、深度は0.3mであることから、

大部分は表土および造成土内に収まったが、U字溝など既設構造物を避けるために掘削深度が深くなった箇所など2地点において、地山の可能性がある浅黄色(5Y7/4)～明黄褐色(2.5Y7/6)シルト土層を検出した(図22・23、写真75・76)。

当該年度に実施した附属農場フィルムハウス設置に伴う造成工事に伴う予備発掘調査(本書所収)では、これまで不明確であった附属農場本館南側敷地に埋蔵文化財が分布することが確認された。附属農場敷地では、近年工事が増加する傾向にある。今後も慎重な対応が必要である。



写真 75 A地点土層断面(西から)

A地点東壁土層断面柱状図

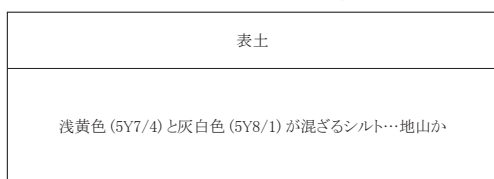
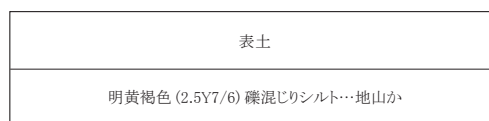


写真 76 B地点土層断面(西から)

B地点北壁土層断面柱状図



0 1m (1/20)

図 23 土層断面柱状図